

序章

第一節 研究の意義

本書が対象とするのは、ロシアの思想家にしてロシア正教会の司祭であったパーヴェル・アレクサンドロヴィチ・フロレンスキイ（一八八二—一九三七）（別図1）の思想である。フロレンスキイという人物が日本において現在までほとんど知られていないことは敢えて指摘するまでもないが、スターリン時代に粛清された彼の著作は、死後長い間、世界のどの場所においてもごくわずかな人々にしか知られることがなかった。一九九〇年代に入ってから、遺族の協力のもと、その著作はロシアにおいて少しずつ（再）出版されるようになり、今では、フロレンスキイの存命中に彼の周囲が下した評価とおおよそ違わず、二十世紀のロシア思想を代表する人物と見做されるようになってきている。とはいえ、その研究は未だ途上にあり、二〇二四年現在、二度目の校訂版も未完である。従って、本書の性格は、フロレンスキイ研究の集大成といったものではない。フロレンスキイはまだ、集大成的

著作が出されるほど研究の進んだ人物ではない。翻訳論文集『逆遠近法の詩学』(一九九八)を除けば、フロレンスキイに関して日本語で書かれた初めての書籍となる本書が、第一に目標として掲げるのは、フロレンスキイという人物の生の証と思考の軌跡とが、より多くの人々に知られることである。つまりこれは、悪名高きスターリン時代の粛清によって前途を絶たれ、それゆえにその全体像を十分に表すことがついに叶わなかった思想家の遺したものを、歴史の塵の中から拾いおこし、二十一世紀の日のもとに再び置こうという試みであって、我々が目指すのは、それが人文学の根本的な営み——時間の中に消えていかんとする声、人々の思考や感情を聴き、受け取り、次の世代へ託すこと——の、ささやかな一例となることである。

フロレンスキイ研究には、ロシア思想史における重要な人物の像を明らかにするという明白な意義の他に、さらに二つの意義がある。ロシア思想において、あるいはロシア思想のみならずロシアの社会、宗教においても、全へ向かう力と個へ向かう力の対立は、常にその動性の大きな要因となってきた。この全と個の問題は、全体主義と個人主義の対立を内包するが、しかしそれだけに単純化されるものではなく、この問題のもとで、たとえば全人類の救済の問題、共同体のありようの問題、我と他者の問題等が不可避的に考えられてきた。この問題がロシア思想においてとりわけ先鋭化するのは十九世紀終わりから二十世紀初頭にかけてであり、全と個のいずれを重んじるかによって生じた二つの潮流には互いに道を譲る余地はないように思われた。ロシア思想史研究の泰斗であるエヴァラームピエフは次のように指摘する。

もし我々が人間たちの一体性を、個々の諸人格と並び立つ、独自の本質として理解するならば、不可避的に浮上するのが次のような形而上学的な「優先権」の問題である。すなわち、個々の諸人格の方が絶対的根源性を持っているので、従ってそれら諸人格の一体性の方は二次的なものであり、それほど本質的ではない、

ということになるか、あるいは、一体性の方が原初的で根源的であり、その場合、諸人格は、独立した存在としての全き完全性を持っていない、ということになるか、のいずれかである。まさにこの対立図式こそ、この「二者択一」こそが、ロシア哲学における「人格主義」^{ペルソナリズム}の支持者と「靈的共同体」^{ソツポリアルノスチ}の支持者との間の激烈な論争全体を規定してきた。

エヴラームピエフは、このような対立的状況からの脱却は、両極端の観点のどちらか一方を採用することによって可能となるのみならず、こうしたジレンマそのものを虚偽であると認めることによって可能であるとして、後者の思想を展開した人物として、レフ・プラトノヴィチ・カルサーヴィン（一八八二—一九五二）らの名を挙げている。だが本書では、フロレンスキイの思想において、全と個の対立に関し、他の思想家と異なる独自の方法で解決策が提起されていることを明らかにしたい。本書で我々は、フロレンスキイ自身が明確な概念化をせずに用いてきたために注目されてこなかった〈形〉という語に着目し、フロレンスキイの思想において〈形〉が持つ意味を分析することで、フロレンスキイが全と個の問題に重要な示唆を与えていたことを明らかにする。このことは、翻って、ロシア思想史の重要な一面面に、これまでとは異なる角度から光を当てるとい意義を持つことになるであろう。さらに、フロレンスキイの〈形〉を巡る思想は、その分野を取って問うならば、宗教思想、神秘思想の皮を被った美学であると答えることが妥当であろうと思われる。ロシアの美学とは、これまでほとんど着目されてこなかった領域であり、本書は新たな学術的領域への道標の一つとなりうる。

今一つの意義は、本書が、二十世紀初頭、ロシア革命前後のロシアの知的状況を明らかにする上での重要な一例となることで、フロレンスキイが当時の科学的知見を積極的に取り入れていることを鑑みれば、それは文化史のみならず、科学的観点からも価値を持ちうる。革命前後からソ連時代にかけてのロシアの知的状況としては、共産党員の動向に関して重要な研究が様々にあり、たとえば近年でも、『ソヴィエト科学の裏庭——イデオロ

ギーをめぐる葛藤と共存』(二〇二三)は、一九二〇年代以降の党員の哲学者や科学者たちが、公定イデオロギーや権力とどのように折り合いをつけながら研究を行っていたのかをつぶさに記述している。他方、本書が扱うフロレンスキイのように、共産党員ではなかった人物が何を考えていたかについては、とりわけ文学者でも芸術家でもない場合には、記述されることが少ない傾向にある。さらに、フロレンスキイという人物は矛盾の多い人物である。ロシア正教会の司祭でありながら、科学に通曉し、数学や科学の最新の知見を思想に取り入れ、さらにはソヴィエトの電化事業にも一役買った。しかし共産党との関係は良くはなく、度々批判の対象とされ、遠方の収容所に送られる。外国の文学に親しみ、外国の芸術を愛し、しかし亡命を打診されながらも——そして弟子たちの亡命を祝福しながらも——自身は頑なにロシアに留まり、ロシアで処刑される。このような人物がその生涯にどのような思想を展開したかということは、ごく単純にも興味深いことであり、またその道行きを辿れば、科学と宗教との、知と神秘との、また西欧とロシアとの、拮抗と融合を目にすることができる。だがこの点には、意義と同時に危うさが潜んでいることを指摘しておかなければならない。フロレンスキイの論には、少なからず西欧への批判、近代への批判、合理性への批判、科学への批判があり、それはフロレンスキイにおいては多くの場合内省を伴っているとはいえず、二〇二二年のウクライナ侵攻開始以降最も悪い形で顕在化しているロシアの自他への意識と地続きであるためだ。

ドイツに追隨した十九世紀を経て、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ロシア思想は自身の独自性を歴史と信仰に求めながら花開いた。この、歴史と信仰がロシアに課してきたものは重い。ピョートル一世の治世(一六八二—一七二五)以降、ロシアの歴史は常に西欧に対する後進性と劣等性の意識とともに想起され、それは思想においても、スラヴ派と西欧派という非常に長く尾を引く対立構造を生み出し、この対立の根は今日のロシア社会にもなお残存している。現在のロシアを政治的にも社会的にも方向づける一要因であるキリスト教の信仰もまた、決して平明なものではない。ルーシにおいてキリスト教が導入された時期は九八八年と遅く、文化において

キリスト教は異教（スラヴ諸民族の土着の多神教信仰）的要素と奇妙に結びつき、エヴラームピエフの言葉を借りれば、「キリスト教的な世界理解は、人生の不動の礎というよりも、むしろ苦渋に満ちた難問になった。この難問の解決の仕方次第で、一人の人間にとっても、国民全体にとっても、生きることの意味が左右されることになった。だがこの難問は、決して最終的に解決されなかった⁴⁾」。こうした重荷である歴史と信仰とを、それゆえに却ってロシアをロシアたらしめる重要な要素として見つめ直すこと、そこにロシアの独自性の根拠を見出そうとすることが、十九世紀後半以降のロシア思想の大きな支柱となったのであるが、それはロシア思想史研究者である北見が「ロシア哲学は、西欧哲学が見逃し続けてきたもの、しかしそうでありつつも西欧的な理性や意識の基盤にあつて、それらを最終的に規定しているもの、そうしたものを自らが所有していると見なすことで、歪んだ優位性を確保することが可能であつた⁵⁾」と指摘するように、ロシアの歴史上の後進性をビザンツ帝国やルーシの継承者という自意識として、正教の信仰の保持を西欧の合理的精神に対するカウンターパートとして捉え直すことで、つまりは西欧に対する遅れを遅れと捉えるのではなく、西欧に対する他者として、自己を再定義することによって成つた。フロレンスキイの思想もまた、この大きな文脈の中にあると考えられるべきであり、それは現況に照らせばただ手放しで興味深いと言えるものではないが、しかしロシアという一国家の運命と向き合う上で、それでもやはり意味のあることであると我々は言いたい。

第二節 研究史

一 出版史

フロレンスキイの著作には、生前には出版されなかつたものが多く存在する。ただし、出版社を通じた出版という形を取らずとも、フロレンスキイは自身の原稿の内容を友人たちに度々語つたり、あるいは手紙に記したりしており、また講義において話すことを前提として書かれたものも多く、未出版であつたということは、必ずし